2回目の人間学類進路説明会を終えて

佐藤有耕
人間総合科学研究科助教授

1. 2回目の進路説明会が開催されるまで

平成16年度は、キャリア支援室が立ち上がり、単なる就職支援ではなく進路指導を含めた幅広い視野からの学生指導が実施される最初の年になったようです。そして全学規模の就職委員会が廃止された年でもありました。

人間学類の就職委員会も、この激変期にあって、活動が目立つようになってきました。少なくとも、学類会議での報告事項は、格段に増えたように思われます。宮寺晃夫前学類長が進路説明会開催の案件を投げかけて以来、人間学類就職委員会は重い腰を上げて、少しずつ動かざるを得なくなったのでした。

今年度は、4月最初の新入生オリエンテーション合宿で、もう卒業後の進路状況について説明しました。5月には、フレッシュマンセミナーの時間を使って、本部就職課の久保田優係長に本学の就職支援体制についてお話ししていただきました。就職サークルの学生さんにも来てもらいました。

そして、11月から進路説明会の準備を始めました。今年度は、12月以降、学生と教員で話し合いを重ねて、内容を決めていくことにしました。第1回目となる昨年度は、進路状況の報告、就職課利用ガイダンスと就職のストラテジーについてのお話しのあとに、6名の先輩学生・卒業生に話をしてもらいましたが、今年度はじっくり話が聞ける会を企画することにしました。

学生の側から出た希望は、一度失敗した経験がある人、インターンシップ経験がある人、留学経験がある人、会社ですでに働いている人、臨床心理士を目指している人、などから話を聞きたいというものでした。学生に聞いてみると、希望はドンドン出てきます。そして学生との3回の会議を経て、4名の方にお話しいただくことを決めました。そのうち2名は学生が自分たちで探し

てきた方で、残り2名の方は教員から推薦してもらった方でした。当日のポスターも学生が作ってくれ、準備は整いました。

2. 進路説明会当日の盛況ぶり

平成17年2月16日、雨模様の中、集まった学生の数は100名を越えていました。11時過ぎから5名の学生スタッフと教員で準備を始め、13時に予定通り開会しました。新井邦二郎学類長の挨拶の後、今年度の進路状況の速報、そしてビジネス科学研究科教授の吉武博通先生のお話しが始まりました。学長特別補佐として多忙な吉武先生ですが、「社会が求める人材とは」というテーマは、吉武先生のキャリアが反映された貴重なお話でした。学生にもインパクトが強かったようです。ビジネス現場で問題解決の成果をもたらすには、3階層の能力が必要であり、そのうちもっとも基礎になるものが「人格・地アタマ（頭脳における地肩の強さ）・信頼する力」である、とのことでした。これなら、人間学類にいても、鍛えられる能力ではないでしょうか。吉武先生のお話の中に、人間学類で学んだことに自信を持つようにというメッセージがありました。人間学類出身であることを武器にして、臆することなくビジネス現場へ挑んでいく勇気をもらった気がしました。

続いて、3つの主専攻から一人ずつ、先輩方に登場してもらいました。一人目は、教育学主専攻4年の杉浦由美子さんです。AC入試で入学後、つくばでスクールボランティアの活動をしながら、現役で岐阜県教員採用試験に合格した先輩です。教育実習や採用試験での経験談は、教員が聞いても新たな発見がありました。日々成長し続けていく姿こそが若き教師の魅力だと思いますが、そういう姿勢がありありとうかがえました。

二人目は、平成10年度に心理学主専攻から卒業した後、ご自分で起業して、現在は有限会社キュービット/CUEBITの代表取締役である草野祐子さんです。草野さんは、それ以外にさまざまな肩書きを持つ方で、その詳細は会社のホームページをご覧いただくとよくわかります（URL：http://www.cuebit.co.jp）。いくつもの大学で、学生対象の就職支援講座を開設されている有名講師でもあります。遠方にもかかわらず、スタッフの方を数名同伴されて、熱のこもったお話をしてくださいました。とくに、筑波大学での4年間の学生生活を月単位で振り返ったスライドには、実に中身の濃い学生生活があふれていました。バイト、臨床活動、学祭などの委員、全国大会、レポート作成、ボランティア、就職活動、教育実習、キャンプ研修、インターン…、きりがありません。社会に出てからの活動ぶ

りも、一度に二つの会社を経営するといった具合で、ため息が出るほどの仕事量をこなされてきたことがわかりました。

三人目は、心身障害学主専攻を卒業後、博士課程総合人間科学研究科に進まれた宮内久絵さんです。宮内さんは国際性の申し子のような方で、海外の高校から二学期入学で筑波大に入り、在学中にも一年間留学しています。大学院入学早々から、海外での研究・教育活動に携わり、その活躍ぶりは、もうひとかどの研究者のものでした。

これだけの魅力ある話題提供者を擁していながら、使える時間が二時間しかなかったことは残念でした。一日分の時間を使って、集中講義のようにした方がよかったかもしれません。しかし、いったん会を閉じた後に、話題提供者の方全員が、学生からの個別の質問に対応してくださいました。直接お話ししてもらえた学生には、またとない機会になったに違いありません。メディアを通してどんな情報も入手できる時代になりましたが、何かを達成してきた身近な先輩の前に立って話を聞き、その存在感を肌身で感じることは、パソコン画面を介してはできないことだと思います。そこにこそ、このような会を学類が準備する意義があるように思われました。壇上で話をした人が、降りてきて自分の質問に耳を傾けてくれ、真剣に答えてくれたという経験は、その学生に大きな自信と喜びを与えてくれると思うのです。

二年間このような会に参加して思うことですが、何かを成し遂げた人、何かに真剣に取り組んできた人は、学生であれ社会人であれ、人間としての魅力があるように思われました。積極性や迫力のようなパワフルな魅力もありますし、静かな頼もしさのような魅力もあります。魅力の味わいは人それぞれですが、もっと話を聞いていたいと思わせるところが共通しています。今日は聴衆の側に座っていた学生たちからも、何年か後には魅力的な先輩になって、壇上から自分の経験を語ってくれる人が出ることでしょう。先輩の話を聞いて育った学生が、今度は話をする側に回って後輩に自分の経験を伝えてくれる。このようなサイクルをつなげていくことが、人間学類の歴史や伝統を築いていくことだと感じた次第です。

3. 来年度以降の活動を考える

今回の進路説明会でも、終了後にアンケートを取りました。他学群からの参加も少しあったことがわかり、とてもうれしく思いました。小さな情報でも一括してもれなく配信するシステムの構築は、これからの総合大学の課題でしょうが、よいシステムが機能するようになれば、他学群・他学

類からの参加者も伸びると思われました。

参加学生の感想の大半は、このような会をもっと開催してほしいということでした。学生の希望に添うなら、複数回の開催を考えることになります。真剣に考えるのであれば、授業化することも一つの方策かもしれません。魅力ある職業人から、その職業につくまでの過程や、その職業の実際についてお話ししていただくということです。三学期に開講すれば、その中に、就職活動をした直後の4年生のナマの声を入れていくことも可能でしょう。

それから、大学院進学についての説明会と、就職に関する説明会を別に開催してはどうかという感想もありました。人間学類の進学希望者は相当数いますので、どちらかというと就職に比重を置いた進路説明会では、もの足りなく思う学生もあるかもしれません。大学院進学であれば、学類の教員全員が関係者であり経験者であるわけですから、講師は無尽蔵です。また、就職については就職課が万全の体制を整えてくれていますが、それに比べて進学についてはそのような体制が整っているわけではなさそうなので、むしろこちらの面を強化することが必要かもしれません。

最後に、人間学類就職委員会の今後のあり方を考えてみたいと思います。就職委員会の構成員は、ほとんどがクラス担任と掛け持ちであり、さらに他の委員会とも掛け持ちしています。もちろん、授業も研究活動も地域貢献もあります。ですから、多くの活動を望むこと自体無理なのですが、望まれていることはたくさんあるように思いました。

入り口の入試に関しては、当然のことながらかなりの労力がつかわれています。どのような入試を行い、どのような学生を入学させるべきかについては多くの議論がなされました。入試の変更が繰り返され、ACセンターも定着しました。これからは、出口である卒業後の進路についても、もう少し貢献する必要が出てくるのではないでしょうか。キャリア支援室が開設され、その準備は着々と整ってきているように思われます。これからの就職委員会は、就職や進学という結果はもちろんですが、そこに至るまでの過程を支えることが求められるのではないでしょうか。経済界や産業界も、大学に対して責任ある教育を求めているように思います。

いわゆる進学校の進路指導は進学指導に偏っており、その弊害が大学入学後の不適応に影響しているのではないかという声を聞きます。行き先という結果を確保することではなく、自分の行き先をどのように考えていくかのプロセスが重要であるならば、就職委員会が取り組むべき課題も当然そこ

になるのではないでしょうか。就職の委員会ではなく、大学生の生き方や人生設計を支援するための組織、すなわち青年教育や大学生教育の組織として位置づけることが期待されているのかもしれません。

大学教員を測るモノサシは、研究業績数しか無い時代ですし、大学院大学として生き残りをかける以上、学部学生へのサービスにかける時間は大学教員としての成績を考えた場合にはムダかもしれません。しかし、目の前に学生がいて、私たちが教員と名乗る以上、専門知識の教育とはまた別に、大学生教育にも力を入れることが時代の要請のように思われます。学生サービスがしたくて大学教員になる人はいないのですし、大学院大学の体制に逆行する気もしますが、教育機関としての筑波大学のクォリティにも誰かが目を向けていく必要がありそうに思われました。

付記　文中に出てくる草野祐子さんは、17年6月より、第二学群B棟2階のキャリアデザインルームのアドバイザーとして活動されています。

（さとう　ゆうこう／青年心理学）